

「底が突き抜けた」時代の歩き方 357

‘いい人は帰ってこなかった’ — フランクル『夜と霧』

話題の映画『戦場のピアニスト』を早速、観た。ナチスの収容所に送られたユダヤ人のピアニストの物語であるが、あのロマン・ポランスキーがこの映画をいわゆるユダヤ人残酷物語の構図の中に収容されずに、どこまでフツの映画として描いているかという一点に関心を引き絞って映画館に出向いた。案に違わず私が観たのは、紛れもなく戦場のピアニストであり、ピアニストの戦場であった。だからこそ、02年カンヌ映画祭でパルムドールを受賞したのであろうが、この作品についてなにかを書く前に、新版の『夜と霧』（V・E・フランクル）の邦訳が『ソフィーの世界』や『世界がもし100人の村だったら』の訳者として知られる池田香代子の手でなされ、刊行されたので、改めて新版『夜と霧』に目を通した。予測どおり、これは『戦場のピアニスト』について書くのに前座的な扱いで済ませられるような書物ではなかったので、『戦場のピアニスト』よりも先にこの書物に向き合うことにする。

『夜と霧』には当然ながら、強制収容所での作者の体験が少なからず記されている。たとえば、冒頭部で「施設に収容される段階」での次のような光景が記述されている。

《1500名は、もう何日も昼夜ぶっ通しの移送の途上にある — その列車には貨車一台に80人ずつが乗せられ、荷物（なけなしの財産）の上にごろごろと折り重なっていた。リュックサックや鞆が積みあげられ、窓は上のほうがかろうじてのぞいているだけで、そこから明け方の空が見える。みんながみんな、この移送団はどこかの軍需工場に向かっており、そこでは強制労働が待っているのだ、と考えていた。

今しも列車は、だだっぴろい平野に停まる気配だ。ここがまだドイツのシュレーゲンなのか、もうポーランドに入りこんでいるのか、だれにも確かなことはわからない。機関車の汽笛がするどくひと声、不気味に響く。まるで、みずからがとほうもない災禍へとつれてきた人の群れになり代わり、不吉な予感に助けを求めて悲鳴をあげたかのようだった。

そうこうするうちに、列車はかなり大きな駅にすべりこんだ。貨車のなかでおののきながらなりゆきを待ちうけていた人びとの群れから、ふいに叫びがあがった。

「駅の看板がある — アウシュヴィッツだ！」

この瞬間、だれもかれも、心臓が止まりそうになる。アウシュヴィッツと聞けばぴんとくるものがあつた。あいまいなだけいっそうおぞましい、ガス室や焼却炉や大量殺戮

をひっくるめたなにか！ 列車はためらうようにゆっくりと進んだ。そう、まるで自分が運んできた世にも不幸な人間という積み荷をおもむろに、そしてなだめすかして現実の前に立たせようとするかのように。「そうだよ、ここはアウシュヴィッツだよ！」と。

ほかにもいろいろ見えてきた。しだいに明るさを増す朝の光のなか、線路の右にも左にも、数キロメートルにわたる巨大な収容所の輪郭がくっきりと浮かびあがった。何重にも張りめぐらされた鉄条網は、まるでこの世の果てまで続いているかのようだ。監視塔、サーチライト、そしてぼろをまとった人間がえんえんと列をなして、暗澹とした薄明のなかを暗澹と、疲れ果て、蹣跚と、収容所の荒涼としたまっすぐの道をのろのろと歩いていく——彼らが行きつく先を、だれも知らない。ときおり、そこかしこで号令の笛の音が響いた——その意味は、だれにもわからない。

ひとりふたりはすでに恐怖の面持ちだ。わたしは、二基の絞首台とそこにぶらさがっている人影を見たように思い、ぞっと怖気^{おそけ}だった。しかし、それどころではなかった。わたしたちはひとり残らず、刻一刻、一步また一步と、底無しの恐怖のなかへといやおうなしに引きずりこまれつつあったのだ——ついに駅に着いた。まだなにも起こらない。とそのとき——号令が聞こえた。あの独特な、耳をつんざくかすれ声。このときから、この叫び声をあらゆる収容所でいやというほど聞かされることになる。その声は殺される者の断末魔の叫びのようだが、やや違っていて、何度も何度も叫ばずにはいられない、何度も何度も殺される男の喉から発せられるかのように、しゃがれ、かすれていた……。

そのとき、貨車の扉が引き開けられ、よくある縞模様^{しま}の服を着た被収容者がどやどやと乗りこんできた。丸坊主にされてはいるが、栄養状態はきわめて良好なようだ。いろんなヨーロッパの言語をしゃべっている。そろって陽気そのもので、この瞬間この状況ではどことなくグロテスクな感じがした。溺れる者は藁^{わら}をもつかむ。このとき以来、何度も過酷な状況を乗り越えさせてくれたわたしの性来の楽天主義^{せいらい}は、この事実にしがみついた。この連中はそれほど惨めそうでもないな。見るからに陽気で、笑ってすらいるじゃないか。わたしもこの被収容者たちのような、わりと恵まれた待遇をうけないなんて、だれにも言えないさ。

精神医学では、いわゆる恩赦妄想^{おんしゃ}という病像が知られている。死刑を宣告された者が処刑の直前に、土壇場で自分は恩赦されるのだ、と空想しはじめるのだ。それと同じで、わたしたちも希望にしがみつки、最後の瞬間まで、事態はそんなに悪くはないだろうと信じた。見ろよ、この被収容者たちを。頬はまるまるとしているし、血色^{けっしょく}もこんなにいいじゃないか！

わたしたちはまだなにも知らなかったのだ。彼らは「エリート」だった。アウシュヴィッツ駅に——何年ものあいだ——毎日何千と送りこまれた人びとを出迎えるために選ばれた、例の被収容者グループだったのだ。出迎えるとは、人びとの手荷物を、そのなかに入っているというか、隠されている値打ち品、つまり当時貴重になっていた日用品

や、こっそり持ちこまれた宝石のたぐいもろとも取りあげることだった。戦争末期の当時、ヨーロッパでアウシュヴィッツほど金銀、プラチナ、ダイヤモンドがこっそり集積していたところはなかった。貴金属や宝石は巨大な倉庫だけでなく、親衛隊員^{s s}のふところや、わたしたちを出迎えた被収容者グループのふところにも貯めこまれていた。

1100人の囚人が小規模収容所へとさらに移送されることになり、その直前、たった一棟の収容棟（思うに定員はせいぜい200人）のむき出しの土間に、寒さに震え、空腹にさいなまれながら、うずくまったり立ったりしていたことがある——全員が坐るだけのゆとりはなかったのだ。もちろん、横になるなど論外だった。わたしたちは、4日間でパンをたったのひと切れ（およそ150グラム）しかあてがわれていなかったが、あるときわたしは、被収容者の班長が、ダイヤのついたプラチナのネクタイピンを示して、例のエリート被収容者と掛け合っているのを小耳にはさんだ。そうした取り引きの目当ては、言うまでもないと思うが、ほとんどの場合ブランデーだった。当時アウシュヴィッツでひと晩を陽気に過ごせるだけのブランデーが何千マルクについたのか、わたしはよく知らない。わかっているのはただひとつ、長期の被収容者にはブランデーが必要だったということだ。身も心も最悪の状況だったのだ。憂さを晴らしたいと思った人のことをとやかく言えるだろうか。》

この最初の移送の光景から、我々が映画や当時の貴重なフィルムを映しだすテレビ等でよく知るように、ガリガリに痩せこけたユダヤの人々の群れや、強制労働の過酷さ、ガス室に送られた人々の積み上げられた累々たる死体などのシーンに反射的につながっていくが、旧版訳者も書いているように、ウィーン生まれのウィーン大学医学部神経科教授（ウィーン市立病院神経科部長兼務）を務める少壮の精神医学者として囑目されていたフランクは、美しい妻と二人の子供にめぐまれる平和な生活を営んでいるときに、突如ナチスに踏み込まれたのである。一家はアウシュヴィッツ等に送られ、彼の両親、妻、子供たちはガス室で殺されたり、餓死に見舞われ、彼だけが生きのびるという過酷な体験をしいられるなかから、この書物が届けられていることを踏まえなくてはならない。

この書物に接する私を含む大半の読者はいうまでもなく、彼が味わってきた極限状況での体験を共有する者たちではない。前述したように、我々は映画やテレビを通じて映像として知っているにすぎない。この「知っている」ことをいくら積み上げても一片の体験に及ばないことは明白である。先に長々と引用した移送の光景の描写にしても、我々なるほど映像としてそのシーンをたやすく思い浮かべることはできるけれども、移送団の人々がアウシュヴィッツという駅の看板を見て、「この瞬間、だれもかれも、心臓が止まりそうにな」ったことは想像してみることができても、どれほどの恐怖であったかということは遂にわからない。自分がかつて味わった恐怖感から類推してみる程度のことしかできない。だいいち、いきなり逮捕されて行き先がわからないまま、列車で集団移送されるという不条理な出来事を想像すること自体が、我々の生活からあまりに

も遠くかけはなれているのだ。

したがって、日本語に訳されている彼の書物のなかの言語を次々と追っていくだけで、彼の体験が少しでも理解できたというふうにはとてもならないが、それでかまわないのだろうか。それは致し方のないことなのだ。誰だってある人の体験したことと同じ体験などできやしないし、たとえ同じ収容所体験であっても、それぞれの受けとめ方まで含めた同じ体験を共有することなどできないからだ。強制収容所について数多くなされているその事実報告が言語による抽象化作業として行われている以上、我々は「強制収容所についての事実報告」を我々の言語体験を通じて受けとめる以外にない、という当然の前提を了解しなければならない。フランクフルは、《なぜこのような本を書くのか、その意味》について、説明している。

《強制収容所についての事実報告はすでにありあまるほど発表されている。したがって、事実については、ひとりの人間がほんとうにこういう経験をしたのだということを裏づけるためにだけふれることにして、ここでは、そうした経験を心理学の立場から解明してみようと思う。その意義は、強制収容所での生活をみずからの経験として知っている読者にとってとそうではない読者にとってでは異なる。第一の読者グループにとっての意義は、彼らが身をもって経験したことが今日の科学で説き明かされることにあり、第二のグループにとっては、それが理解可能なものになる、ということだ。つまり部外者にも、他者である被収容者の経験を理解できるようにし、ひいてはほんの数パーセントの生き延びた元被収容者と、彼らの特異で、心理学的に見てまったく新しい人生観への理解を助けることが、ここでの眼目なのだ。なぜなら、これはなかなか理解されないからだ。当事者たちがよくこう言うのを耳にする。

「経験など語りたくない。収容所にいた人には説明するまでもないし、収容所にいたことのない人には、わかってもらえるように話すなど、とうてい無理だからだ。わたしたちがどんな気持ちでいたのかも、今どんな気持ちでいるのかも」

このような心理学的な試みには、言うまでもなく方法論的な困難がつきまとう。心理学は、学問的な距離をとれ、と要請する。しかし、収容所生活を体験した者に、体験のさなか、彼自身を観察する暇^{いとま}などあっただろうか。もとより、部外者は距離をとっていた。ただし、とりすぎていた。経験の激流から遠く離れていた部外者は、妥当なことを言える立場にはない。

「まったくだなか」にいた者は、完全に客観的な判断をくだすには、たぶん距離がなさすぎるだろう。しかしそうだとすると、この経験を身をもって知っているのは彼だけなのだ。もちろん、みずから経験した者の物差しはゆがんでいるかもしれない。いや、まさにゆがんでいるだろう。このことは度外視するわけにはいかない。そこで、いわゆるプライベートなことにはできるだけふれないことが、しかし他方、必要な場合には個人的な経験を記述する勇気をふるいおこすことが重要になってくる。なぜなら、このよ

うな心理学的探究のほんとうの危険は、それが個人的な調子をおびることではなく、かたよった色合いをおびることにあるからだ。そこで、わたしがここに書いたことを今一度、こんどは没個人的なものにまで蒸留し、ここにわたしが差し出す経験の主観的な抄録を客観的な理論へと結晶させることは、安んじてほかの人びとの手にゆだねようと思う。》

経験は伝わらない。経験について語った言葉だけが伝わる。しかしながら、事実報告について語る言葉は事実報告について語る言葉として伝わるだけで、言葉の伝達のなかで事実そのものはけっして伝わることはない。なぜなら、「ほんとうにこういう経験をしたのだということ」は言葉として伝えることができたとしても、経験の状況そのものは言葉の伝達では不可能だからだ。状況は共有する以外にない。だから、当事者たちが「経験など語りたくない」というのは、あまりにも当然のことなのである。フランクはそのことをよく知り抜いているように思われる。だから、「ここでは、そうした経験を心理学の立場から解明してみようと思う」のだ。精神医学者である彼が「心理学の立場から」といっても、学問的な素養をいくらかでも必要とする専門的な分野として別に敬遠しなくともよい。そうではなく、強制収容所という極限の状況に放り込まれたとき、人間というものは自己を最優先的に守るために、どのような心の動きを経てどのように具体的に振る舞っていくのか、拡大されて浮き彫りにされてくるといっているのだ。

たとえばフランクは、《人間はなにごとにも慣れる存在だ、と定義したドストエフスキー》の正しさを噛みしめることになる。人間はなにごとにも、どこまでも慣れる存在だが、《どのように、とは問わないでほしい……》という。

《人間にはなんでも可能だというこの驚きを、あといくつかだけ挙げておこう。収容所暮らしでは、一度も歯をみがかず、そしてあきらかにビタミンは極度に不足していたのに、歯茎は以前の栄養状態のよかったころより健康だった。あるいはまた、半年間、たった一枚の同じシャツを着て、どう見てもシャツとは言えなくなり、洗いの水道が凍ってしまったために、何日も体の一部となり洗うこともままならず、傷だらけの手は土木作業のために汚れていたのに、傷口は化膿しなかった（もちろん、寒さが影響してくれば別だったが）。あるいは、以前は隣の部屋でかすかな物音がしても目を覚まし、そうなるともう寝つけなかった人が、仲間とぎゅう詰めになり、耳元で盛大ないびきを聞かせられても、横になったとたんにぐっすりと寝入ってしまった。》

歯みがきの件はともかく、酷寒の中での「たった一枚の同じシャツ」のことや、仲間との「ぎゅう詰め」状態での寝入りについては、我々にはおそらくこれまでもなかったし、また今後もそんな経験をすることはほとんどないだろうから、へえっと感心するだけでけっして実感を伴うことはない。しかし、こういった事実等から、「人間はなにごとにも慣れる存在だ」というドストエフスキーの定義を引き出してくるなら、自分や自分の周囲の体験に照らして、よく納得することができる。現に我々はいまもこの電腦化された超高度な情報化社会のなかで、平然と呼吸しているではないか。フランクたち

が放り込まれた選択不可能な極限状況での体験がいくら我々の想像を絶する体験であったとしても、「人間はなにごとにも慣れる存在だ」という真実のなかで、どのような過酷な体験も理解できるようになるのである。

どのような理解を絶する光景からでも、同じ問題を取り出すことができる。

《強制収容所の人間は、みずから抵抗して自尊心をふるいたたせないかぎり、自分はまだ主体性をもった存在なのだとすることを忘れてしまう。内面の自由と独自の価値をそなえた精神的な存在であるという自覚などは論外だ。人は自分を群衆のごく一部としか受けとめず、「わたし」という存在は群れの存在のレベルにまで落ちこむ。きちんと考えることも、なにかを欲することもなく、人びとはまるで羊の群れのようにあっちへやられ、こっちへやられ、集められたり散ら^{しぎやく}れたりするのだ。右にも左にも、前にも後ろにも、なりは小さいが武装した、狡猾で嗜虐的な犬どもが待ちうけていて、どなったり、長靴^{ちようか}のかかとで蹴りつけたり、あるいは銃床^{じゅうしょう}で殴りつけたりしながら、ひっきりなしに前後へろへと追いまわす。わたしたちはまるで、犬に噛みつかれないようにし、隙さえあればわずかばかりの草をむさぼることで頭はいっぱいの、欲望といえばそんなことしか思いつかない羊の群れのようにだと感じていた。

そして、おびえて群れの真ん中に殺到する羊そのままに、だれもかれもが、五列横隊の真ん中になろうとし、さらにはできるだけ全中隊の中ほどにしようとした。そうすれば、中隊の横や先頭やしんがりにいる監視兵から殴られにくいからだ。さらには、中ほどにいれば風がまともに吹きつけないという利点もあった。》

一般の人々は強制収容所などとは無縁に暮らしているので、当然ながら武装した監視兵に囲まれるなかでの行進や、自己保身から「できるだけ全中隊の中ほどにしよう」と目の色を変えて殺到する被収容者たちの必死な姿は、現在の自分たちの日常からは遠く、そのシーンを思い浮かべることはできても、その体験を実感することはとてもできない。ところが、《強制収容所に入れられた人間が集団の中に「消え」ようとするのは、周囲の雰囲気の影響されるからだけでなく、さまざまな状況で保身を計ろうとするからだ。被収容者はほどなく、意識しなくても五列横隊の真ん中に「消える」ようになるが、「群衆の中に」まぎれこむ、つまり、けっして目立たない、どんなささいなことでも親衛隊員^{s s}の注意をひかないことは、必死の思いでなされることであって、これこそは収容所で身を守るための要諦^{ようてい}だった。》とフランクルが書きつけるとき、彼は強制収容所での人間の習性について記述しながら、強制収容所の外の世界にいる我々の習性にまで踏み込んでいると感じて、一瞬ドキリとしないだろうか。

「集団の中に『消え』ようとするのは」、強制収容所に入れられた人間ばかりではない。強制収容所とは異なる自由な社会で呼吸している我々もまた、「集団の中に『消え』ようとする」。それは強制収容所に入れられた人間と全く同様に、「周囲の雰囲気に影響されるからだけでなく、さまざまな状況で保身を計ろうとするからだ。」被収容者でなく

とも、「群衆の中に」まぎれこんで、けっして目立たず、どんなささいなことでも周囲の注意をひかないようにして生きることは、自由な社会においても「身を守るための要諦^{ようてい}」なのである。「強制収容所の人間は、みずから抵抗して自尊心をふるいたたせないかぎり、自分はまだ主体性をもった存在なのだということを忘れてしまう。内面の自由と独自の価値をそなえた精神的な存在であるという自覚などは論外だ。」というフランクルの言葉はしたがって、時に我々の耳には強制収容所の外の世界に放たれた強烈な皮肉のように響いてしまう。

強制収容所に入れられていなくとも、自由な社会に住んでいながらも、我々は「みずから抵抗して自尊心をふるいたたせないかぎり、自分はまだ主体性をもった存在なのだということを忘れてしまう」。自由な社会では、「内面の自由と独自の価値をそなえた精神的な存在であるという自覚」を当然の前提として、我々は生き活きとしているだろうか。確かに強制収容所では、《人格までもが、すべての価値を懷疑の奈落にたたきこむ精神の大渦巻きに引きずりこまれ》て、《人間の命や人格の尊厳などどこ吹く風という周囲の雰囲気、人間を意志などもたない、絶滅政策のたんなる対象と見なし、この最終目的に先立って肉体的労働力をとことん利用しつくす搾取政策を適用してくる周囲の雰囲気、こうした雰囲気の中なかでは、ついにはみずからの自我までが無価値なものに思えてくる》だろうから、「内面の自由と独自の価値をそなえた精神的な存在であるという自覚など」を持ちつづけることが、いかに困難で自分を窮地に追い込むものであるかは、今更説明するまでもなからう。

ここで奇妙なことに気づく。「人間の命や人格の尊厳などどこ吹く風という周囲の雰囲気」に満ち満ちた強制収容所においては、人は這いつくばってでも生き抜くために、「自分はまだ主体性をもった存在なのだということを忘れてしま」おうとするだろう。そのことを忘れぬように「みずから抵抗して自尊心をふるいたたせ」ることは、たえず自分の命を危険に晒しつづけることであるからだ。自分の命を危険に晒してまで「みずから抵抗して自尊心をふるいたたせ」るべきなのか、それが人間としての筋道なのかどうか、判断は保留する以外にない。しかしながら、娑婆ではもちろんのこと、「人間の命や人格の尊厳などどこ吹く風という周囲の雰囲気」に満ち満ちているわけではないし、強制収容所のように「自分はまだ主体性をもった存在なのだということを忘れ」ねばならなくなるほど、自分の命がたえず危険に晒されているわけではない。なのに、一般の人々は「群衆の中に」まぎれこんで、けっして目立たないようにすることのほうが生きやすいし、気楽に呼吸ができると考えられているし、実際そうしている。

「内面の自由と独自の価値をそなえた精神的な存在であるという自覚」を保ちつづけるのに、強制収容所では命を懸けねばならないのに対して、外の自由な社会では命を危険に晒さなくともよい。そのことが強制収容所と外の自由な社会とを分かつ大きな理由であると思われるが、しかしながら、命を危険に晒す必要がないにもかかわらず、人々は

自由な社会で自分が一個の「内面の自由と独自の価値をそなえた精神的な存在であるという自覚」を深めることなく、強制収容所での集団生活と同様に、「群衆の中に」まぎれこもうとする気持ちもちつづけているとするなら、ここで問われてくるのは、自由な社会における＜自由＞とはなにかということだ。自由な社会で生きる人々は、その＜自由＞をどのように行使しているのか。＜自由＞をどのようににも行使していないというのであれば、自由な社会というものもまた、自由な強制収容所にほかならないのではないか。

強制収容所では人間は親衛隊員の注意をひかないように、「群衆の中に」まぎれこんで、けっして目立たずに必死の思いで身を守るのが要諦だというのであれば、外の自由な社会で人々は一体誰の注意をひかないように、「群衆の中に」まぎれこんで、けっして目立たずに自分の身を守ろうとするのだろうか。その誰とは誰のことなのか。おそらく特定される者ではありえないだろう。要するに、「群衆の中に」まぎれこんで目立たないほうがよいと思い込まれているのだ。なぜなら、一個の「内面の自由と独自の価値をそなえた精神的な存在」として、どのような場所でも生きていく責任を負わなくてすむからである。つまり、自分に対する自分の責任を果たしたくないのだ。このような人間は強制収容所であろうと、自由な社会であろうと、どこにでも膨大にいるだろう。自分に対する責任を果たさなくてはならぬほどの、「内面の自由と独自の価値をそなえた精神的な存在」である「わたし」などどこにもいないということである。

強制収容所は、それを生みだし、必要とする自由な社会そのものが「強制収容所」的な社会にほかならないということを意味している。自由な社会が「強制収容所」的な社会であるのは、「群衆の中に」まぎれこんで、けっして目立たないように声を潜めて生きる人々が大半だからである。逆にいえば、大半の人々が「群衆」をかたちづくらず、したがって、「群衆の中に」まぎれこんで目立たずに生きることをやめたとき、すなわち、「自分はまだ主体性をもった存在なのだということを忘れ」ずに生きようになったとき、もはや自由な社会は強制収容所など必要としない、本当の意味での自由な社会へと近づくにちがいない。だから、強制収容所の存在は外の自由な社会もまた、「強制収容所」的であることを浮き彫りにしているのである。

ここで別の疑問がどうしても湧き起こってくる。言葉の真の意味において、「内面の自由と独自の価値をそなえた精神的な存在であるという自覚」を持ちつづけてきた者なら、たとえ命の危険に晒される強制収容所であっても、いや、そのような強制収容所であればあるほど、その自覚を持ちつづけて強制収容所を生き抜こうとするだろう。命の危険を前にその自覚を打ち捨ててしまうなら、その程度の自覚であったということに今後彼は悩みつづけてはならないし、それ以上にその自覚を喪失して生きつづけることのほうが、自覚を持ってたえず命の危険に晒されつづけることよりも、彼にとって耐えがたいことであるのは間違いない。「内面の自由と独自の価値をそなえた精神的な存在」として生きつづけてきた者にとっては、強制収容所での生活はその自覚が本当のも

のであったのかどうか問われてくる試金石的な意味あいを帯びているにちがいない。

だが他方で、「人間はなにごとにも慣れる存在」であるなら、人間の命や人格の尊厳など木っ端微塵に打ち砕いてしまう強制収容所の環境に慣れた奴隷にふさわしい精神を、人間はかたちづくるのではないのか。「内面の自由と独自の価値をそなえた精神的な存在であるという自覚」は、一体どのようにして「人間はなにごとにも慣れる存在」であるという厳然たる事実に向かい向かうことができるのか。人間には《あたえられた環境条件にたいしてどうふるまうかという、精神の自由はないのか、と。人間は、生物学的、心理学的、社会学的と、なんであれさまざまな制約や条件の産物でしかないというのはほんとうか、すなわち、人間は体質や性質や社会的状況がおりなす偶然の産物以外のなものでもないのか、と。そしてとりわけ、人間の精神が収容所という特異な社会環境に反応するとき、ほんとうにこの強いられたあり方の影響をまぬがれることはできないのか、このような影響には屈するしかないのか、収容所を支配していた生存「状況では、ほかにどうしようもなかったのか」と。》、そう、フランクは問いかける。

《経験からすると、収容所生活そのものが、人間には「ほかのありようがあった」ことを示している。その例ならいくらでもある。感情の消滅を克服し、あるいは感情の暴走を抑えていた人や、最後に残された精神の自由、つまり周囲はどうあれ「わたし」を見失わなかった英雄的な人の例はぼつぼつと見受けられた。一見どうにもならない極限状態でも、やはりそういったことはあったのだ。

強制収容所にいたことのある者なら、点呼場や居住棟のあいだで、通りすがりに思いやりのある言葉をかけ、なけなしのパンを譲っていた人びとについて、いくらでも語れるのではないだろうか。そんな人は、たとえばほんのひと握りだったにせよ、人は強制収容所に人間をぶちこんですべてを奪うことができるが、たったひとつ、あたえられた環境でいかにもふるまうかという、人間としての最後の自由だけは奪えない、実際にそのような例はあったということを証明するには充分だ。》

時々刻々と内心の決断を迫る収容所の状況にあっては、《人間の内面にいったいなにが起こったのか、収容所はその人間のどんな本性をあらわにしたかが、内心の決断の結果としてまざまざと見えてくる。つまり人間はひとりひとり、このような状況にあってもなお、収容所に入れられた自分がどのような精神的存在になるかについて、なんらかの決断を下せるのだ。典型的な「被収容者」になるか、あるいは収容所にいてもなお人間として踏みとどまり、おのれの尊厳を守る人間になるかは、自分自身が決めることなのだ。》

「収容所にいてもなお人間として踏みとどまり、おのれの尊厳を守る」ことを決断した人々が、収容所でうまく立ち回って必死に生き延びようとはしなかったであろうことは、容易に想像できる。《収容所暮らしが何年も続き、あちこちたらい回しにされたあげく一ダースもの収容所で過ごしてきた被収容者はおおむね、生存競争のなかで良心を失い、

暴力も仲間から者を盗むことも平気になってしまっていた。そういう者だけが命をつなぐことができたのだ。何千もの幸運な偶然によって、あるいはお望みなら神の奇跡によってと言ってもいいが、とにかく生きて帰ったわたしたちは、みなそのことを知っている。わたしたちはためらわずに言うことができる。いい人は帰ってこなかった、と。》

フランクは正直に語る。だが、わたしたちは生きて帰ってきた、と。そう語る彼が「いい人」でなかった筈がない。しかしながら、「いい人」には「何千もの幸運な偶然」も、「神の奇跡」も見舞うことがなかったのか、「帰ってこなかった」。あえて彼はそう語ることで、生きて帰ってくることができたことによって、自分は「いい人」ではなかったという含みを持たせているように感じられる。おそらく彼は事実を語っているのだが、この事実はすべてをはっきりと物語っているようにみえるだけに、彼にとってしんどい事実であろうことが察せられる。しかし、彼はその事実のしんどさを突き抜けたところで、この書物の重しとして据えるように、「いい人は帰ってこなかった」というまなざしを提出していると受けとめられる。

「人間はなにごとにも慣れる」ことによって生き延びようとするほどに卑小な存在であるということを、けっして忘れてはならない。その卑小な存在の対極に、「慣れる」ことのない崇高な精神的存在が聳え立っているということではない。たぶん膨大な卑小さがひと握りの崇高さを生みだし、押し上げているのだ。いいかえれば、収容所生活はやがて自分の卑小さがみえる少数の精神と、自分の卑小さが見えなくなってしまう膨大な精神とにはっきりと分かっていく。前者は生き延びることに引きずられる自分の卑小さに耐えられなくなっていくだろうし、後者は生き延びることが至上課題とされてますます自分の卑小さが見えなくなっていくだろう。つまり、前者は人間が生きることは生き延びることにあらずに傾いていくなら、後者は人間が生きることは生き延びることだ、に傾いている。それでも双方は共に、卑小さをかかえこんだ存在であることによってつながっているのだ。

「いい人は帰ってこなかった」とフランクは書くことによって、収容所のような場所でも、いや、そのような場所だからこそ、「いい人」は存在したということを指し示しているのだ。卑小さに打ち克ったのではなく、人間の膨大な卑小さが「いい人」をつくりだしていったのだ、と。「いい人は帰ってこなかった」けれども、「いい人」でない人もたくさん帰ってこなかった。「とにかく生きて帰った」フランクは、「いい人は帰ってこなかった」と書くことによって、「とにかく生きて帰った」自分たちの目の前にいなくなってしまった、自分を含む無数の人々のことを忘れないために、無名の墓碑銘を刻み込んでいるように思われてならない。

2003年3月4日記

